仙台北三番丁教会
2023年12月10日 待降節第2主日

たとえ世界が滅びようとも

代務牧師　齋藤　篤

ルカによる福音書21章29～33節
29それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。30葉が出
始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。31それと同じように、あなたがたは、
これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。32はっきり言っておく。すべ
てのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。33天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅
びない。」

©日本聖書協会『聖書 新共同訳』

私たちは、救い主イエスの御降誕をお祝いするに先立つ、アドヴェント（待降節）2回目の日曜日を迎えました。そのような期節のなかで、私たちは毎年考えることでしょう。どうして私たちは「待つ時」というものが与えられているだろうか、と問いについてです。

アドヴェントとは、もともと「来る前に」というラテン語から来た言葉です。救い主イエスが来られる前に、私たちが救い主を心からお祝いするために、備えをする期間として、信仰の先達たちが自分たちの暦のなかで設けてきたものです。そこには、アドヴェントという期間を設けなさいという、聖書による直接の命令や根拠があるわけではありません。しかし、私たちはそれでも、アドヴェントという期間を通して確かに、「救い主を心から待つ人々の歴史」というものが、聖書を通して語られ続けてきたことを、実感することができるのです。そういう意味で言えば、聖書そのものが、私たち一人ひとりに「待つ」ということを教え、どのように待つべきか、待っている間に、何を備えることが大切なのかということを、私たちの誰もが黙想し、確かめていく期間、それがアドヴェントであると言えるでしょう。

本日、私たちに与えられた聖書の言葉は、救い主イエスによって、まさに「待つとはどういうことなのか」、そして、「私たちは何を備えることが大切なのか」という、アドヴェントの時期に考えることのできる私たちに与えられた課題について、そのことが語られている聖書の箇所であると言えるでしょう。私たちは、アドヴェントにこそ聴くことのできる御言葉として、耳と心を傾けてまいりたいと思います。

本日読まれました、ルカによる福音書21章における御言葉ですが、イエスによってこのような言葉が語られた「前提」というものがあります。それが、6節に記されています。今日の聖書箇所ではありませんが、6節をお読みいたしますと、このようにあります。

> あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に
> 残ることのない日が来る。

これは、イエスによって弟子たちに対して語られた言葉ですが、イエスの言われる「これらの物」とは、イスラエルの都エルサレムの中心にして、人々にとって心の拠り所である、エルサレム神殿のことを指しました。長い期間をかけて、ようやく自分たちの神殿が建設されて50年あまりが経とうとしていました。それは実に美しい神殿でした。しっかりと建ちそびえているこの神殿が、一つの石も崩されずに残ることはない日が来る。イエスがそのようなことを言われた時、その場にいる誰もが、驚き、慌てふためいたに違いないのです。だから、弟子はイエスに尋ねました。

> 先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。（7節）

これから、どのようなことが訪れるのか、やって来るのだろうか。弟子たちの関心は、その「時と徴」についてでした。いつ、どのように。そのようなことを知る目的は、まさに私たちが「どのように備えることができるのか」という、アドヴェントに与えられた私たちの関心に相通じると言えるのです。

それからイエスは、いわゆる神殿が崩壊するような世界が訪れる時、私たちの身の上に何が起こるのかを、一つ、また一つ提示されます。その内容は、決しておだやかなものではありませんでした。私たちが身震い、気を失ってしまうようなおどろおどろしさというものが、イエスの口を通して語られていきます。そのひとつとして、本日私たちに与えられた聖書の言葉として述べられたのでした。

イエスによって語られたのは、ひとつのたとえ話です。「いちじくの木」をイエスは引き合いに出されたのです。イエスは、そのいちじくの木について、このようなことを語られました。

> 葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。（30節）

枝が柔らかくなり、葉が出始めると、夏が近づいたことが分かる。このことに、疑いを挟む人は誰もいないでしょう。イスラエルでも、現にこの日本においても、果実を生み出す木々は、夏に先立って葉が繁っていくのを、誰もが知っています。では、イエスは、どのような思いをもって、このようなことを仰せられたのでしょうか。このことを知るために、私たちはあるキーワードに注目することができます。それは「夏」です。

日本において、今年2023年の夏は、まさに酷暑と呼べるものでした。テレビのニュースで「命の危険が叫ばれる」という言葉が、何度も登場したことをご記憶なのではないでしょうか。何を大げさなと思いつつも、実際に熱中症でお亡くなりになられた方も多くあったことを、思い起こすことができます。夏は比較的涼しい仙台の街ですら、考えられないくらいの暑さが私たちを襲ったのでした。

イエスが「夏」という季節を語られるときに、やはり日本と同様、イスラエルにおける「暑さ」というものを、私たちは想像することができます。しかし、考え方によっては、イスラエルの夏も相当過酷なものであることを、私たちは想像することができるのです。この時期はもとより、イスラエルでは、春分から秋分の季節、つまり3月下旬から9月下旬ごろまで、雨が一滴も降らない「乾季」という季節がやって来ます。水気がまったく感じられない季節というものは、高温多湿の夏を迎える日本にとっては、いささか考えにくいかもしれません。

空気が乾燥する上に、太陽の光がじりじりと焼き付かせる環境というものは、私たちの生活に大き

な影響が生じます。肌が乾燥するうえに、照りつける日光によって、やけどのような症状を引き起こします。ですから、彼らは肌を守るための対策をしなければなりません。放っておくと、健康に影響を与えます。水分も、定期的に補給しなければなりませんが、水の確保が大変難しい時ですから、それも容易ではありませんでした。

草木も、乾燥と日光によって、この季節は枯れてしまいます。野の花がドライフラワーのようになってしまうのも、この季節なのです。そのようななかで、いちじくの木に葉が出始め、実をつけ、やがて収穫に向けて成長する時、それが「夏」であると言えるのです。

草木が枯れてしまうような状況の中でも、いちじくは成長します。しかし、その成長のプロセスというものは、決して簡単なものではない、日照りと感想のなかで、夏の厳しさをただ乗り越えなければならない、じっと待たなければならない。それが、いちじくの成長期であると言えるのです。

しかし、誰もが知っています。その厳しい夏を乗り越えて、やがて秋分の頃には、空からポツリポツリと恵みの雨が降り注がれる。その時には、私たちの心をときめかすような甘さのいちじくが、収穫の時期を迎えることになるのです。決して枯れることの無いいちじくが、私たちに恵みの果実というものをもたらす。イエスがいちじくの木をたとえ話のモティーフとするときに、それを聞いた人たちはおそらく、そのようなイメージを抱くことできたのではないか。そう思えてならないのです。

一見すると、すべてを滅ぼしてしまうような環境にあっても、神は必ずそれらをご自分の知恵と力で乗り越えさせてくださる。いちじくの木を通して、イエスは弟子たちに対して、たとえ世界が滅びようとも、決して滅びないものがあることを明らかにされました。イエスは言われます。

天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。（33節）

イエスは、私の言葉こそ、決して滅びることはないということを断言されました。つまり、甘さとみずみずしさにあふれたいちじくの実こそ、イエスの語られる言葉につながっていくことを、私たちに思い起こさせるのです。私たちの目からしたら、何かが滅びてしまうような不安が私たちを襲い、待つことすら耐えがたいと思えるようなことがあったとしても、その過酷さを乗り越えたところに、神の言葉である救い主イエスが、私たちのもとにやって来られる。そこには、私たちの心を平安へと導く力があるということを、イエスは弟子たちに語られたのでした。

そういう意味で言えば、アドヴェントという期節は、救い主がやって来るという希望や、クリスマスという私たちの心が躍り出すようなイベントが目白押しとなる時にあって、私たちを取り囲む現実というものに、注目しなければならない時でもあるのでしょう。おとといから、この仙台の街も光のページェントが始まりました。定禅寺通りには、私たちの心をときめかすイルミネーションが輝き続けます。しかし、この時にも、私たちの間では、決して喜ぶことのできないさまざまな出来事のゆえに、痛み、悲しみ、苦しみを経験しなければならない人たちのことを想わずにはいられないのです。私も、あなたも、あの人もこの人も、そのような過酷な時を大なり小なり過ごさなければならないことを想わされます。

しかし、そんな私たちにも、イエスはご自分の言葉を携えてくださるのです。希望をもって、その希望が現実になるような時を、私たちは決して滅びることのない神の言葉を握りしめながら、その時をじ

っくりと待つ。それこそ、アドヴェントの時を過ごす私たちに最も必要なことと言えるでしょう。

祈り
神である主よ、私たちは待たなければいけません。待ちたくなくても、待たされることもあります。
しかし、決して滅びることのないあなたの言葉が、私たちにやがて来たる果実の喜びを、救い主イエスを待ち望むための希望の源として、私たちに与えられていることを感謝いたします。
どうか、アドヴェントの日々、私たちに与えられた聖書の言葉を通して、待つことの幸いというものを教え諭してくださいますようにお願いします。
救い主、イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。